

高大が連携し、課題解決能力の育成に 取り組む「ふくおか高校生知の創造塾」

福岡県では、議論を通じた生徒の課題解決能力の育成と、課題解決能力育成のための高校教師の指導力向上を目的に、「ふくおか高校生知の創造塾」を実施。2006年に前身となる事業がスタートして以来、さまざまな改善を図り、継続している。大学教員、高校生、そして高校教師が参加する2泊3日の合宿を中心に、高大連携の先進例として取り組みの内容とその成果を紹介する。

取り組みの概要

九州大の協力を得て、主体的な学びを体験する場をつくる

多様な高校から生徒が集い、
大学教授と合宿

知識基盤社会、グローバル社会を生きる生徒の課題解決能力の育成は重要なテーマであり、2013年度から完全実施された新学習指導要領でも、生徒の基礎的な知識・技能等を活用して思考力・判断力・表現力を高め、課題解決能力を育成することが求められている。そうした中で、福岡県は九州大基幹教育院の協力を得て、県内の高校から150人程度

の生徒と12人程度の教員を公募し、生徒が課題について熟考・熟議し、課題解決能力を育成する高校生知の創造力育成セミナー事業「ふくおか高校生知の創造塾」（以下、知の創造塾）を行っている。

「知の創造塾」における生徒の活動の大きな流れは、①事前学習の内容やその方法などを学ぶプレセミナー、②議論を経てポスターセッションを行う夏休みの2泊3日の合宿、③九州大が開発したWebシステムを中心に事後学習だ。



福岡県教育庁教育振興部
高校教育課 課長
米原泰裕 よねはら やすひろ
文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課専門官などを経て現職。

生徒に提示される課題は、メインテーマと、メインテーマにアプローチするための切り口となる複数のサブテーマで設定される。13年度のメインテーマは「我々は何を学ぶべきか?」、そしてサブテーマは「TPPから考える日本と世界の今後のあるべき姿」「日中関係の現状理解と関係悪化の打開策」「放射線・放射能の生物への影響」「生殖医療・出産のあり方」など7つが設定された。

「応募作文の内容などを基に、生徒を約20人ずつ、学校・学年を混在させながら7つのサブテーマに振り分

けます。各サブテーマには九州大の先生方がファシリテーターとして付き、事前学習、合宿を通して生徒の活動をサポートします。更に、高校教師が大学の先生方のティーチングアシスタント(TA)として参加し、課題解決型の探究学習の方法を学びます」(本事業主管の福岡県教育庁教育振興部高校教育課・米原泰裕課長)

**他者との議論を通して
学びの意味に気付く**

7月のプレセミナーでサブテーマに関する事前学習の方法を学んだ後には、Webシステムの掲示板等を利用して、生徒は同じサブテーマに所属する仲間と意見交換したり、大学教員に質問したりしながら、サブテ

ふくおか高校生知の創造塾
概要 (2013年度)

●メインテーマ

「我々は何を学ぶべきか？」

●定員

生徒 150 人程度、教員 12 人程度

●実施内容

●7月13日

開講式、事前研修(プレセミナー)：九州大にて(九州大教員・大学生の基調講義、サブテーマに分かれての講義・事前研修など)

●8月18日～20日

合宿：大分県玖珠郡九重町のホテルにて
【1日目】サブテーマ班に分かれての事前学習発表、講義と質疑応答

【2日目】サブテーマ班に分かれての講義と熟議、ポスターセッション準備

【3日目】7つのサブテーマ班が混在するクラスでの各班の発表と熟議、開講式



●8月末

事後研修：主に Web システムにて(生徒は事後レポートを提出し、九州大教員から指導を受ける)

マへの理解を深め、合宿への意欲を高める。Web システムは12年度から導入したが、これによって、生徒の事前学習が深まり、議論にスムーズに入れるようになったという。

そして合宿では、大学教員のファシリテートでサブテーマ別に生徒が主体となって討議し、最終日にはメインテーマでのポスターセッションを行う。生徒は自分が所属するサブテーマの発表を行い、更に他のサブテーマの発表を聞くことになる。

「合宿で生徒は『人と議論すること』で新しい考えが生まれることが実感できた』『1つの疑問を解決すると、また新しい疑問が生まれるのだと分かった』など、学びの本質に迫ります。

また、ポスターセッション後、生徒からは『政治学と医学など、一見関連性がないように見えるサブテーマが、絡み合っていたことが分かった』など、まさに知の創造を実感する感想も上がってきます。そして、T Aの高校教師からは『大学の先生のようにな、もっと生徒の気付きを待ちたいと思った』『知識の伝授だけでなく、今後は自ら学ぶ力の育成にもっと力を入れたい』など、議論を重視した課題解決型学習への意欲の声が聞かれます(米原課長)

次ページでは、「知の創造塾」に参加した生徒と教師のインタビューから、それぞれどんな気付きを得て、自分を変えていったかを検証する。

高校と大学の学び方の違いを知り、
「知る楽しさ」に気付いてほしい

九州大基幹教育院 学修・健康支援開発部 准教授 眞崎義憲

「知の創造塾」とその前身の事業に、ファシリテーターとして、あるいは合宿最終日のポスターセッションをメインテーマの議論へとつなげていくコーディネーターとして、過去4回参加しました。毎年、3日間の合宿での高校生の成長、変化に驚かされます。

トでは「学びは最高の遊びだと分かった」と書いた生徒がいました。その生徒はそれ以降、高校での授業の取り組み方も、大きく変わったはずで、

私たち大学教員がこの取り組みの中で重視しているのは、最終日のポスターセッションの出来映えではなく、「他者との議論を通して答えを導くプロセス」に気付くこと、高校までの学びと大学での学びのスタイルの違いを知ることです。ただ、スタイルは違っても、知らないことを知る楽しさを味わうという意味では、大学も高校も同じです。3日間の合宿での仲間との議論を経て、多くの生徒がそのことに気が付いているようです。13年度の参加者のアンケート

学校や年齢の違いを超えて活発に議論する様子を見ると、考える力を養う教育は、高校からでも十分できると実感しています。それなのに、今の社会は子どもの力を小さく見積もり、知識偏重の教育を続けているため、子どもたちは大学入学までに疲れ切つて、学びの意欲を失ってしまうのではないのでしょうか。大学生を教える立場として、高校生の姿から教えられるものは少なくありません。

「知の創造塾」には、普通科の生徒だけでなく専門学科の生徒も参加しています。教科学力や知識の面では差はあるのでしようが、大学教員やT Aの先生が丁寧にサポートすれば、1つの集団として議論は成立し、それぞれ成長していきます。その意味でこの取り組みは、考える力を持った人材を広く育成する種まきなのだと思います。



まさき・よしのり◎専門は内科学、健康科学。呼吸器内科の医師でもある。大学教職員、学生の生活習慣改善の研究などに取り組む。

*プロフィールは2014年3月時点のものです。

「知の創造塾」に参加した〈生徒〉の声

考えることの楽しさに感動し、
自分自身の学びの姿勢が変わった自分1人では気付けない
考えにたくさん出会えた

「知の創造塾」への参加を決めた1番の理由は、前の年に参加した高校の先輩に「絶対に参加した方がいい」と強く勧められたことです。先輩は「九州大の先生に、大学での学び方を指導してもらえた」に参加することで、いろいろなことに挑戦する意欲が湧いた」と教えてくれました。そこで、友だちを誘って参加することにしたのです。

九州大で行われたプレセミナーで、ファシリテーターの先生や他の高校の生徒と顔合わせをし、事前学習の進め方などを指導していただいたおかげで、合宿への不安も少なくなりました。同じサブテーマの仲間とメー

ルアドレスを交換して、友だちの輪が広がったことを感じました。

合宿では、事前学習の成果を踏まえながら、みんながそれぞれサブテーマについて自分の意見を言い、それに対して「いや、こんな考えもある」などと別の視点での意見を出し合いました。学校の授業でも話し合いはありますが、合宿では何十分間も議論に没頭しました。高校生が集まっているけれど、学校とは全く違う場でした。私は「出生前診断」という重いテーマで話し合いましたが、他の人の意見を聞いて「そんな考えもあるのか」と、感動で何度も体が震えました。自分1人では絶対にたどり着けない考えが、たくさんあることに驚きました。

ただ、学校の授業の中で時間を掛けて議論しても、あれほどは盛り上がりがないかもしれません。事前学習に取り組んで、最低限の知識を身に付けていたから意見が言えたのだと

思いますし、普段の自分を知らない人たちとだから、どう思われるか気にせず話し合えたような気がします。

学ぶことの楽しさに気付き、
授業の受け方が能動的に

合宿3日目のポスターセッションでは、他のサブテーマの発表も聞きました。化学の分野など、私にはあまり興味がないサブテーマもありましたが、実際に発表を聞くと、そのサブテーマの人たちが一生懸命考えたことがよく分かりました。どんなサブテーマに所属したとしても、きつと充実した3日間になったと思います。

合宿が終わった瞬間の感想は、「考えることはこんなに楽しいんだ！」でした。「あと1か月ここで暮らして、みんなと一緒に勉強したい」と思ったほです。私の高校生活の中で、最も楽しい時間の1つになりました。「知の創造塾」の時に比べると、以前の私の授業での態度は、明らかに受け身でした。勉強しないと付いていけないという不安感で仕方なく取り組んでいたというのが、正直なところですが、合宿が終わって1週間くらい経ってから、「我々は



▲サブテーマでの議論の様子

何を学ぶべきか？」というメインテーマで最終レポートを書くうちに、「分からないことを追究する」という意味では、学校の授業も十分に面白いものであるはずだと思いつたのです。それからは、授業で疑問に思ったことや興味を持ったことを自分で調べたり、別の視点で考えたりするようになり、以前よりも授業がずっと楽しく思えてきました。教わるだけだと面白くないけれど、自分で学ぶと楽しくなる。大切なのは、自分自身の学びの姿勢なのだと思います。



福岡県立福岡高校 2年生
三宮 暎 さんのみや・けい
将来の夢は、情報関係の仕事に就くこと。好きな教科は国語、物理。苦手な教科は化学。

議論に没頭し、多様なアプローチを楽しむ 雰囲気をつくりたい

話したいという気持ちを
生徒に持たせる

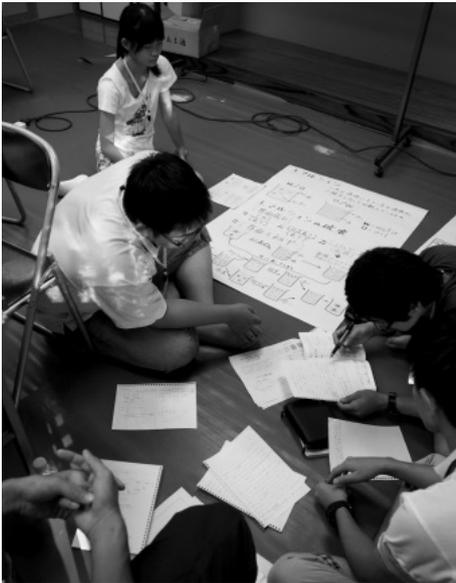
「総合的な学習の時間」などでも、生徒が議論して、発表する活動に取り組みますが、全ての生徒が積極的に発言するわけではなく、中には議論を傍観するだけになってしまう生徒もいます。全員に意欲を持たせて、話し合いの面白さを実感させることは決して簡単ではありません。生徒は、クラスの中で自分がどう思われているのかをとて気にしますし、意見の土台となる知識が不足していることもしばしばです。

それでも、「知の創造塾」のように、議論に没頭する環境をつくるのは、教師の工夫次第では可能だと思います。まず大切なのは、テーマに



福岡県立福岡高校
深江一美 ふかえ かずみ
教職歴10年。福岡県立田川高校、東
鷹高校などを経て、13年度より福
岡高校に赴任。2学年担任。国語科。

▼ポスターセッションの準備の様子



対する知識、考え方を身に付けさせて、生徒の中に話したい気持ちを抱かせることです。前任校での経験ですが、国語の授業で森鷗外の『高瀬舟』を学んだ後、「安楽死は罪か」というテーマで、とても深い議論が成り立ちました。授業を経て、生徒に語りたい気持ちが生まれていたからです。その時は、それまでの自分が議論の進め方ばかりに気をとられて、生徒の気持ちを盛り上げることが十分だったことに気が付きました。

「総合的な学習の時間」では多くの場合、全クラス一律のテーマを扱います。しかし、「知の創造塾」のように、メインテーマは同じでも、クラスによってサブテーマ、つまり切り口を変えてみるのも一案だと思います。担当教師の授業と連携することで、生徒の知的好奇心を刺激することができ、「話したい」という気持ちにさせることが出来るのではないのでしょうか。

アプローチの重要性を 生徒に伝えたい

「知の創造塾」で特に新鮮だったのは、ゴールを明確にしないまま生徒に話し合いをさせたことです。授業では、それはあまりない

ことです。特に最近では、生徒が自己評価しやすいように、活動の目標を明らかにすることが求められています。しかし、議論の着地点が分からないまま活動を始めることで、生徒が自由に議論できるといっても、「知の創造塾」を通して分か

りました。1つの答えに全ての生徒がたどり着くように導こうという意識を、時には捨てることも私たちに必要なかもしれません。

生徒は国語という教科に対して「答えが1つではないから嫌い」とよく言います。そうした生徒のために、私は、いかに確実に「正解」にたどり着くかという指導をしていたように思います。けれども「知の創造塾」では、生徒は答えが1つではないテーマに対して多様なアプローチでの議論を楽しんでいました。ならば国語でも、「答えには多様なアプローチがあり、絶対的な答えがあるわけではない。大切なのは客観性だ」としっかり伝えれば、生徒は答えの幅も楽しめるのではないかと思います。

実は私は、「知の創造塾」に参加した生徒が、学校の授業を「面白くない」と否定的に捉えるのではないかと危惧していました。ところが、三宮さんのように「熟考・熟議するためには、基礎的な知識や考え方を学ぶ学校の授業が大切だと分かった」という生徒がたくさんいました。私の予想をはるかに超えて、生徒が学びの意味を深く考えたことに感動しました。

*プロフィールは2014年3月時点のものです。